

血球計数検査の項目

赤血球数

異常に数値の高いのは多血症^{たけっしやう}でみられますが、低いときには各種の貧血^{ひんけつ}などが原因とみられます。

ヘモグロビン(色素)量

赤血球に含まれている酸素、あるいは二酸化炭素と結合して運搬する役目のある色素の量を表すもの。

ヘマトクリット値

血液全体に占める血しょうを除いた赤血球などの容積をパーセントで表すもの。

白血球数

化膿性疾患^{かのうせいしつかん}、白血病^{しんせいいたけっしやう}、出血^{しゅつけつ}、真性多血症^{まじやうたけっしやう}などになると、白血球の数が増え、感冒^{かんぼう}、急性肝炎^{きゅうせいへんやん}などでは減少します。

血小板数

血小板の主な役目は止血作用^{しりっさきやう}です。極端に減少すると、凝固障害^{こうこくしやうがい}が起き、皮下や脳内の出血^{しゅつけつ}をきたすことがあります。原因に、急性白血病^{きゅうせいへんけつ}、再生不良性貧血^{さいじやうりやうせいひんけつ}などがあります。

患者さんの安全と安心のために

献血された血液は安全な輸血が行われるよう血液型をはじめ厳しい検査を行っています。



免疫血清検査の項目

ABO血液型

輸血に際して最も大切な血液型(赤血球の型)で、日本人はおよそ40%がA型、30%がO型、20%がB型、10%がAB型です。輸血には同じ型を用います。

Rh血液型

赤血球には五つのRh因子^{いんし}があり、そのうちのD因子をもった人をRhプラス(陽性^{やうせい})、もっていない人をRhマイナス(陰性^{いんせい})といいます。

日本人はRhプラスが少なく、200人に1人位です。

輸血するときには、Rhマイナスの患者さんには、マイナスの血液のみを用います。

不規則抗体

輸血副作用の原因となる抗体の有無をみる検査です。

このほかにも、赤血球の数と容積あるいは色素量^{しきそりやう}のバランスが保たれているか否かの指標^{しひやく}として、平均赤血球容積^{へいきんしやくけつじやう}、平均赤血球ヘモグロビン濃度^{へいきんしやくけつへもぐろびん}があります。



梅毒

陽性を示した場合は輸血用血液には使用しません。

HBs抗原

B型肝炎ウイルスに感染しているかどうかを検査します。

HBc抗体

HBs抗原検査ではとらえきれないB型肝炎ウイルス感染^{かんせん}を発見するための検査です。

HCV抗体

C型肝炎ウイルスに対する抗体の有無をみる検査です。

このほか、輸血による感染防御^{かんせんぼうえい}のため、HTLV-1抗体^{たいたい}(成人T細胞白血病^{せいじんていせうぼうけつ})、HIV抗体^{たいたい}(エイズ^{いず})などの検査を行っています。